

報告書

食を通じた子育て支援プログラム開発研究事業
テーマ「暮らしと子供の発達」

平成 22 年度
保育園における食育の実態調査

熊本県立大学 環境共生学部 松添直隆
環境共生学部 和島孝浩
環境共生学部 田尻華子
尚綱大学 生活科学部 川上育代

はじめに

平成20年度から、熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会は、熊本県立大学と尚絅大学と共同で「食を通した子育て支援プログラムの開発研究」を実施している。この2年間の取り組みを経て、各保育園での「食」や「食育」に対する意識が変化したと考えられる。一方、本事業のワークショップで「食」や「食育」に対する意識や考え方は、保育園内（職種）、家庭と保育園で異なることが明らかになった。

そこで、平成22年度は、「家庭」「保育園と家庭」「保育園内（職種）」並びに「子育て支援プログラムへの参加の有無」による食育に関する考え方、食意識および食行動の違いを明らかにすることを目的とした。本アンケート調査の結果から、「食を通した子育て支援」に対する本プログラム事業の役割について若干の考察を加えた。

本研究を行うにあたりアンケート調査にご協力頂きました熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会、本連絡協議会に加盟する保育園ならびに保護者の皆様に感謝の意を表します。

対象および方法

1) 調査内容

(1) 調査対象

熊本県地域子育て支援センター連絡協議会に加盟している熊本県内の51の保育園とした。各保育園でのアンケート対象者は、園長1名、保育士3名、管理栄養士または栄養士1名、調理師1名、並びに保護者30名（5才児の保護者15名、4才児の保護者15名）の計36名である。全体で1836名を対象とした。最終的に40保育園から回答を得た（回収率78.5%）。園長38名（回答率68.6%）、保育士111名（回答率72.5%）、管理栄養士または栄養士19名（※）、調理師36名（※）、保護者885名（回答率57.8%）の計1089名から回答を得た。（※）栄養士および調理師は各園により配置人数が異なるので算出不可能である。

(2) 調査期間および方法

平成22年8月に実施した。質問紙は被調査者の自己記入とし、用紙の配布、回収は保育園に依頼した。

(3) 調査内容

[保育士・調理師・栄養士]：属性、食意識・行動、保育園の食育活動、園児についての23項目

[園長]：属性、食意識・行動、保育園の食育活動、園児に加えて保育園の理念など35項目

[保護者]：属性、食意識・行動、保育園の食育活動、家庭の食事状況など49項目

(4) 解析方法

統計解析には解析ソフト SPSS18.0 を用いた。グループ間の差の検討には χ^2 検定を用

い、有意水準を 5.0%とした。

結 果

1. 保護者

1) 属性：各家庭の家族構成は片親のみの世帯と回答したのが 39 人 (4.6%)、2 世代世帯と回答したのは 508 人 (62.7%)、3 世代以上世帯と回答したのは 302 人 (37.3%) であった。

2) 食意識について

回答は最も高いものを示す。(%)はその割合。

質問 1 「現代の子供の食環境づくりに大切なことは何ですか？」

回答 1 「家庭から子供への働きかけ」(85.2%)

質問 2 「子育てに関する食の情報源は何ですか？」

回答 2 「テレビや新聞などのメディア」(49.0%)、「保育園」(33.1%)

質問 3 「自然に親しみ思いやりのある子になってほしい？食卓を家族で囲むことは大切だと思いますか？ 食事のあいさつは大切だと思いますか？」

回答 3 「大変そう思う」, それぞれ (85.7%)、(86.3%)、(87.7%)

質問 4 「食品の安全や調理に関する知識・技術について意識していますか？」

回答 4 「意識している」(62.6%)

質問 5 「自分のお子様の年齢に合った適切な食事内容、食事量を知っていますか？」

回答 5 「少し知っている」(49.1%)

3) 食行動について

質問 1 「食意識の項目で食卓を囲むことは大切だと思いますか？」

回答 1 「大変そう思う」(86.3%)

質問 2 「食卓を囲んで食事をしていますか？」

回答 2 「毎日する」(74.1%)

質問 3 「食意識の項目で食事のあいさつは大切だと思いますか？」

回答 3 「大変そう思う」(87.7%)

質問 4 「食事のあいさつをしていますか？」

回答 4 「いつもする」(68.7%)

質問 5-1 「外食の頻度は？」

回答 5 「月 1 回」(62.5%)、「週 1 日」(23.7%)、「外食しない」(12.0%)

「週に数日」(1.3%)、「ほぼ毎日」(0.5%)。

2 世代世帯と 3 世代以上世帯との比較：「週 1 日」が 2 世代世帯 (27.0%) で有意に高かった。

質問 5-2 「中食の頻度は？」

回答 「月 1 日」(46.3%)、「週 1 日」(33.5%)、「中食を食べない」(11.4%)、「週に数日」(8.0%)、「ほぼ毎日」(0.8%)。

2 世代世帯と 3 世代以上世帯との比較：「週 1 日」は 2 世代世帯 (36.7%) と 3 世代以上 (28.2%) で有意に差があった。「中食を食べない」は 2 世代世帯 (9.5%) と 3 世代以上世帯 (14.8%) で有意に差があった。

質問 6 「朝食の摂取状況は？」

回答 6 「毎日食べる」 (96.2%), 「ときどき食べる」 (3.2%), 「食べない」 (0.6%)

平日と休日の朝食：保護者と子供ともに「主食+1 品」が最も多く、2 番目は保護者と子供ともに「主食+2 品」であった。3 番目は保護者「主食のみ」、子供「菓子パンやヨーグルト、果物などの単品」であった。「菓子パンやヨーグルト・果物」に注目すると、保護者は平日 4.5%, 休日 7.1% であり、子供は平日 6.4%, 休日 9.9% であった。

質問 7 「子供の食事状況で気になることは？」

回答 7 「偏食」 (43.0%), 「偏食」は野菜の好き嫌いが半分以上占めていた。

4) 食育活動

質問 1 「保育園の食育の取り組みを知っていますか？」

回答 1 「知っている」 (53.2%), 「十分知っている」 (26.3%), 「あまり知らない」 (18.4%), 「知らない」 (2.1%)

質問 2 「どのようにして食育の取り組みを得ていますか？」

回答 2 「園からのお便り」 (79.2%), 「子供との会話」 (35.9%), 「送り迎え時の保育士との会話」 (36.3%)

質問 3 「食育活動に参加したことがありますか？」

回答 3 「ある」 (43.9%), 「ない」 (56.1%)

食育活動に参加していない理由：「忙しい」 (64.1%) が最も多い。

質問 4 「園の野菜作りがコミュニケーションに有益ですか？」

回答 4 「とても有益である」 (37.1%), 「有益である」 (55.9%)

2. 保育園 (園長、保育士、調理師、栄養士)

1) 食意識 (園長の回答を保育園の意識とした)

質問 1 「保育の中で大切にしていることは？」

回答 1 「遊びこめる, 人間力の基礎作り」 (66.7%), 「元気な体作りなどの体育」 (50.0%), 「食育」 (33.3%)

質問 2 「現代の子供の食環境づくりに大切なことは？」

回答 2 「家庭から子供への働きかけ」 保育園 (71.6%), 保護者 (85.2%)

質問 3 「食事のあいさつを大切だと思いますか？」

回答 3 「大変そう思う」 保育園 (94.5%) が保護者 (87.2%) より有意に高かった。

質問 4 「食事のあいさつをしていますか？」

回答 4 「いつもしている」 保育園 (97.0%) が保護者 (68.9%) より有意に高かった。

2) 食育活動

質問1 「保護者へ食育の大切さが伝わっていますか？」

回答1 「少し伝わっている」(78.8%), 「十分伝わっている」(10.6%), 「あまり伝わっていない」(10.6%), 「伝わっていない」(0.5%)

質問2 「保護者に対する食育活動の働きかけの方法で頻度が高いものは？」

回答2 「園からのお便り」(71.1%), 「送り迎え時の保護者との会話」(35.2%), 「保護者参加型の活動」(35.2%)

質問3 「園児の家庭での食環境状況を把握していますか？」

回答3 「少し把握している」(60.8%), 「あまり把握していない」(21.5%), 「十分把握している」(9.1%), 「把握していない」(8.1%)

3) 保育士と栄養士・調理師による比較

質問1 「園児の家庭での食環境状況を把握していますか？」

回答1 「把握していない」栄養士・調理師(7.4%), 保育士(0%)

質問2 「園児の家庭での食環境情報をどのようにして得ていますか？」

回答2 「送り迎え時の保護者との会話」保育士(49.5%), 栄養士・調理師(14.7%), また「その他」栄養士・調理師(52.9%)は保育士より有意に高い。その他の回答として「アンケート」があった。

質問3 「食育活動を誰に働きかけていますか？」

回答3 「園児と保護者両方」保育士(83.3%), 調理師・栄養士(76.0%)

質問4 「食育活動を保護者にはどのように働きかけていますか？」

回答4 「園からのお便り」保育士(56.2%), 調理師・栄養士(95.9%), また「送り迎え時に保護者との会話の中で伝える」保育士(40%), 調理師・栄養士(0%)

質問5 「園児の食環境状況で気になるところはありますか？」

回答5 「偏食」保育士(51.5%), 調理師・栄養士(63.5%), 2番目は保育士「食べるのが遅い」(18.8%), 調理師・栄養士「その他」(13.5%), 3番目は保育士「その他」(17.8%), 調理師・栄養士「硬いものを食べない」(11.5%)

(4) 子育て支援プログラム参加有無による比較

子育て支援プログラムの活動に参加したことがある保育者(参加あり群)と、参加したことがない保育者(参加なし群)で比較した。参加あり群は各保育園での1年間の食育活動の実施回数は「7回以上」87.5%で、参加あり群が参加なし群(36.8%)より有意に高かった。また「常に、毎日が食育」という回答があった。

質問1 「子育てに関する食の情報源は何ですか？」

回答1 「保育園」が参加あり群(39.1%), 参加なし群(49.2%)で両群でともに最も高かった。2番目は参加あり群は「研修会」(43.5%), また参加なし群は「研修会」27.3%と「テレビや新聞などのメディア」27.3%が多く占めていた。

考察

現代の保護者の子育てに関する食の情報源は祖父母の同居に関係なくメディアであることが明らかになった。保護者の情報源の2番目が保育園だったことから、家庭に身近である保育園による確かな情報の提供が必要であると考え、そのためには保育者が子育てや食育に関する確かな知識や技術を学ぶ必要がある。

本調査の結果から、子育て支援プログラムのような研修会は、子育てに関する食の情報を得る場になること、また研修会を機会に食育活動に積極的に取り組む姿勢が見られた。このことから保育者の知識や技術の習得のために子育て支援プログラムのような研修会は非常に有効であると考え、さらに、確かな情報を保護者に伝えていくためには、保護者と保育園がお便りを活かして情報交換を活発に行うことが大切である。

本調査から、保護者の食育活動の情報源が「お便り」の次に「子どもとの会話」という結果が得られたことから、保育園が園児に対して食育活動を積極的に行うことも大切である。また、保育の中で食育を進めるにあたり、園長先生、保育士、栄養士（管理栄養士）、調理師それぞれの職員が専門性を活かし情報交換を行うなど連携して食育に取り組む必要がある。

参考資料

- (1) 平成 22 年度研修内容
- (2) 平成 22 年度食育アンケートの結果
- (3) 平成 21 年日本食育学会の発表要旨（熊本県立大学、平成 22 年 5 月 29 日～30 日）
保育園における「食を通した子育て支援プログラム開発研究事業」
第 1 報 ～研究事業の目的と内容について～
保育園における「食を通した子育て支援プログラム開発研究事業」
第 2 報 ～研修会のアンケートとワークショップについて～

(1) 平成 22 年度食を通した子育て支援プログラム開発研究事業

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
平成 22 年度	①講演会『家族を育てる食卓支援』～心を育てる食卓・かわりを食べる～	講演と実習『食と農の体験』～食育活動に関する現状と課題の整理～	①講演会「絵本から飛び出たおやつ子どもの夢をかなえよう」～楽しみながら好きなものが増える子どもたちへ～	①講演会『メディアに惑わされない食生活』～フードフェアリズムとメディアリテラシー～

(2) 平成22年度食育アンケートの結果

別途資料

(3) 平成21年日本食育学会の発表要旨

保育園における「食を通した子育て支援プログラム開発研究事業」 第1報 ～研究事業の目的と内容について～

○和島孝浩¹⁾, 川上育代²⁾, 濱崎美紀³⁾, 榊田正治⁴⁾, 小岱紫明⁴⁾, 森田 正⁴⁾, 村上千幸⁴⁾, 桑原岳洋⁴⁾, 橘 孝昭⁴⁾, 宇佐美純代⁴⁾, 佐土原芙美子⁴⁾, 松添直隆¹⁾

¹⁾ 熊本県立大学, ²⁾ 尚綱大学, ³⁾ (株) 尚綱サポートセンター,

⁴⁾ 熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会

【目的】近年、核家族、夫婦共稼ぎ、男女共同参画社会の推進、少子高齢化により、夫婦、兄弟姉妹、親子などの家庭内環境、家庭と地域との関係、それらの在り方に対する国民の考え方は大きく変化している。また、家庭内環境や意識の変化、家庭と地域との関係の崩壊により世代間・地域間の連携が希薄になり、本当に必要な「食育」や「子育て」に関する情報を選択し、「暮らし」や「子どもの発達」に活用することは難しい状況にあると考える。この様なことから、保育園での「子育て支援活動」は円滑な社会を形成・維持していくための重要な拠点と考える。本研究は、熊本県立大学と熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会との共同で、保育園における「食を通した子育て支援活動プログラム」の開発を目的とした。研修会の内容を表に示す。

【方法】研修会には連絡協議会の保育園（平成20年度：11保育園，同21年度：64保育園），熊本県立大学，尚綱大学，熊本農業高校の教職員と学生が参加した。

【結果および考察】平成21年度研修会は、「ワークショップ」、食と農の関わりを実感できる実習、理論を理解する講演会を行った。実習として、「食農体験施設での料理教室」「生ごみリサイクルと野菜作り」「食育を実践している保育園視察」、また講演会として「保育園で進める食育の理論と実践」などを行なった。評価が高かった「ワークショップ」「生ごみリサイクルと野菜作り」「保育園で進める食育の理論と実践」は21年度も実施した。野菜作りについては知識や技術不足などの課題も挙げられた。

表 平成20・21年度の研修内容

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
平成20年度	ワークショップ「食育」について考える	実習「食と農の体験塾」ワークショップ「食育の現状と課題の整理(1)」	実習「里山で暮らす」ワークショップ「食育の現状と課題の整理(2)」	講演と実習「生ごみリサイクルと野菜作り」	実習「精進料理の調理実習」事例発表会「保育園が行っている食育活動」	講演とワークショップ「生ごみリサイクルと野菜作り」	講演会「保育園で進める食育の理論と実践」公開講演会「楽しく食べる食育で子どもが伸びる」	ワークショップと公開講演会「旬について考える」	第2回子育て支援センター九州セミナー「保育者の専門性を生かした保護者支援とは」
	第1回		第2回		第3回		第4回		
平成21年度	講演と実習「生ごみリサイクルと野菜作り～生ごみリサイクルと元気野菜づくりが食を大切に感じる心を育てる～」		講演会「保育園における食育と理論～味覚と嗜好の形成について～」交流会		特別講演「いのち 愛おし」講演「生ごみリサイクルと野菜作り～元気野菜作りから元気つくりへ～」		実践事例報告会「保育園における乳幼児の発達と食の関係～2年間の研修と実践を通して見えてきたもの～」ワークショップ「保育園における食育の課題と展望～次年度の食育計画作成に向けて」		

保育園における「食を通した子育て支援プログラム開発研究事業」

第2報 ～研修会のアンケートとワークショップについて～

○川上育代¹⁾, 和島孝浩²⁾, 濱崎美紀³⁾, 榊田正治⁴⁾, 小岱紫明⁴⁾, 森田 正⁴⁾, 村上千幸⁴⁾, 桑原岳洋⁴⁾, 橘 孝昭⁴⁾, 宇佐美純代⁴⁾, 佐土原英美子⁴⁾, 松添直隆²⁾

¹⁾ 尚綱大学, ²⁾ 熊本県立大学, ³⁾ (株) 尚綱サポートセンター,

⁴⁾ 熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会

【目的】若い親が「食育」や「子育てに」関する正しい知識や考え方を得て、また実践していくには保育園の役割は非常に大きいと考える。本研究は、熊本県立大学と熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会との共同で、保育園における「食を通した子育て支援活動プログラム」の開発を目的とした。本報告では2年間の研修会のアンケートとワークショップについて紹介する。

【方法】研修会には、平成20年度は連絡協議会の幹事園11保育園、平成21年度は連絡協議会の64保育園、並びに熊本県立大学、尚綱大学、熊本農業高校の教職員と学生が参加した。参加者の意識や考え方を調査するために、平成21年度にワークショップ、平成22年度にアンケートとワークショップを実施した。研修会に関する質問は、「楽しかったですか」「目的は理解出来ましたか」「得るものはありましたか」「今後の食育活動に生かせる内容がありましたか」「感想」「要望・意見」の6項目で、非常にそう思う(5点)～思わない(1点)の5段階評価と記述形式とした。

【結果および考察】平成20年度本研修会の第1回目のワークショップでは、「食育」についての共通語として「健康」「コミュニケーション」「マナー」などが挙げられたが、「食育」に対する考えは保育園やグループ(①園長, ②保育士, ③調理師・栄養士)によって異なった。アンケートやワークショップの結果からは、2年間の研修会において、保育園での食に対する意識の変化が分かる。例えば、「食はすべての基礎となる」「子どもとともに体験することの大切さ」「食育計画は保育士が行うが、同時に、栄養士・調理師との連携や共通理解が重要であること」などの認識が強くなった。一方、今後の課題として、「子どもたちの家庭での食事の内容や環境が把握できていない」「保育園から家庭へ食育の大切さを伝える方法」「家庭と保育園との考え方の差」などがあり、「食を通した子育て支援」には、家庭を知ることの重要性、また家庭と保育園との関係作りが大切であることが明らかになった。なお、本プログラムは平成22年度以降も継続して行われる予定である。